For all children,
Let's face a child's tear.

国際シンポジウム
チャイルド・デス・レビュー
《命に学び、命を守る》

Child Death Review
2019.2.2-3

会場●東海大学 高輪キャンパス2号館

Symposium Report

厚生労働研究費助成 成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業
小児死亡事例に関する登録・検証システムの確立に向けた実現可能性の検証に関する研究
（研究代表者: 溝口史剛）

シンポジウム概要：

チャイルド・デス・レビュー（CDR）とは、子どもが死亡した際にそのことを全数把握し、予防しえた可能性があったか否かという観点から検証を行い、将来的な同様の死亡を可能な限り減らしていくためのシステムです。

CDRは単に小児版死因究明制度・死亡登録データシステムのように捉えられたり、虐待死の見逃し防止システムのように捉えられることもありますが、それらを包含した「すべての子どもの死を無駄にせず、社会が学び、今を生きる子どもが安全に過ごせる環境を作っていくために、多機関が連携して知恵を出し合い、その英知を蓄積し具体的に行動を起こすこと」がCDRということができます。

本シンポジウムでは、1日目にこれまでの研究成果と我が国のCDRの現状を発表するとともに、我が国に先立ち既にCDRを国家的に社会実装している米国・英国、そして今まさに日本と同様に社会実装を積極的に検討している台湾からシンポジストを招聘し、本邦がどのようにCDRの社会実装を行うべきであるか、議論を行います。

2日目には、海外のシンポジウムをファシリテーターとして、模擬事例を用いて実際の個別事例検証とCDOP（小児死亡包括検証）を体験していただきます。

平成30年12月8日に成育基本法（成育医療等基本法）が成立し、第15条の2に「国及び地方公共団体は，成育過程にある者が死亡した場合におけるその死亡の原因に関する情報に関し，その収集，管理，活用等に関する体制の整備，データベースの整備その他の必要な施策を講ずるものとする」と明記され、施策としてCDR制度を構築していく基盤が整った（芽が出た）状態になりました。ただしCDRを本当の意味で社会に根づいた制度（華が開いた状態）にしていくためには、各論部分、すなわち実際の方法論、を確立していく必要があります。そのためには現状で実際にCDRの概念を理解し、実践を積み重ねていく必要がある点に変わりはありません。

本シンポジウムに参加した皆様が、地域に知見を持ち帰り、具体的実践を進めていくことが、本邦においてCDRを社会実装していく力になると考えております。

CDRとは以下のプロセスすべてを含めた包括的システムである

- **予防可能な小児死亡の減少**
- **具体性のある施策提言とその実施**
- **死因究明の質向上・死亡時対応の均霑化**
- **多機関連携の促進（→生存児の安全担保）**
- **客観的なデータベース構築**
- **死亡による悲嘆への包括的支援体制の確立**

第1日　スケジュール

2月2日　逐語通訳あり

9:30-10:00　・主催者挨拶　　溝口史剛（前橋赤十字病院小児科）
　　・子どもを亡くした遺族からのメッセージ》
　　・来賓挨拶　　自見はなこ参議院議員／小児科医

10:00-11:00　・基調講演1　　座長: 仙田昌義（旭中央病院小児科）
　　「チャイルド・デス・レビュー
　　アメリカ合衆国のシステムについて」
　　テレサ・コビントン

11:00-11:30　・講演1　　座長: 神薗淳司（北九州市立八幡病院）
　　「日本のCDRの取り組みの現状について」
　　沼口敦

11:30-12:15　・講演2　　座長: 内山健太郎（賛育会病院小児科）
　　「チャイルド・デス・レビューを推進する
　　台湾の経験」
　　呂宗學（ロバート・ルー）

13:15-14:15　・基調講演2　　座長: 岩瀬博太郎（千葉大学/東京大学法医学）
　　「イングランドにおけるチャイルド・デス・レビュー
　　死からの学びと家族支援」
　　ジョアンナ・ガースタング

14:30-16:00　・パネルディスカッション
　　座長: 溝口史剛/岡田邦之（おかだこどもの森クリニック）
　　「諸外国のCDRから学ぶ・本邦に活かす」
　　パネリスト：
　　各講演者
　　尾角光美（一般社団法人リヴオン）
　　山岡結衣（オクラホマ大学ヘルスケアセンター
　　児童虐待ネグレクトセンター）

16:00-17:15　・終わりの言葉　　山中龍宏（緑園こどもクリニック）

・メッセージをいただく、ご遺族プロフィール

芝夫妻

2016年に仕事の関係で長女を出産後に家族で渡米するが、長女が生後５ヶ月26日の時に乳幼児突然死により亡くなる。夫婦共に社会と健康について研究しており、日本でのチャイルドデスレビュー制度の完成により子どもの突然死と社会環境や社会格差との関連について明らかになることを期待している。

小鶴 佳苗さん

2012年に次男が白血病の闘病中に、菌に感染し急変の末、亡くなる。死別から半年で、「小さないのちの会」と出会い、自らも現在はスタッフとして活動し、大学、大学院にも進学。修士過程（心理臨床学）では医療者と子どもの両親の関係の重要性についてまとめた。

・講師紹介（講演順）

テレサ・コビントン
Theresa （Teri）Martha Covington
公衆衛生学博士。ミシガン州のthe National Center for Fatality Review and Prevention （CDRのナショナルセンター）のディレクターに15年従事し、アメリカ国内および国外のCDRトレーニングを行ってきた。

沼口敦
Atsushi Numaguchi
小児科医/小児救急科医
名古屋大学医学部救急科。愛知県におけるCDRの悉皆調査を複数年度にわたり実施。現在、日本小児科学会　子どもの死亡登録・検証委員会委員長として、本邦のCDRシステム構築を牽引している。

呂宗學
Tsung-Hsueh （Robert）Lu
公衆衛生学博士。台湾のNational Cheng Kung University(國立成功大學）の公衆衛生学教室教授。台湾におけるCDRの社会実装の中心的役割を果たしている。

ジョアンナ・ガースタング
Joanna Garstang
小児科医。NHS及びWarwick大学に所属し、the Birmingham Child Death Overview Panelのメンバー。SIDS/SUIDの専門家であり、CDRの指導的立場として尽力。SIDS/SUIDで子どもを亡くした遺族団体であるthe Lullaby Trustとも緊密な連携を行っている。